



児玉誠先生の御退任を惜しむ

児玉誠先生は2018（平成30）年3月31日をもって、本学を定年退職される。先生は1984（昭和59）年に明星大学人文学部の専任講師に就任され、爾来、30年以上、まず一般教育として英語や法学を教えられ、次に、経済学科の教員として憲法、行政法の講義を担当され、同時に、通信教育学部や全学共通科目の法学も教えられた。

先生は1947（昭和22）年に鹿児島県でお生ま

れになり、静岡県で初等・中等教育を受けられた。1967（昭和41）年に上京され、日本大学法学部法律学科に入学された。その後、先生は日本大学大学院法学研究科で、アメリカの憲法と政治の研究者である斎藤敏教授に師事されて、西洋政治史を学ばれ、「イギリス領アメリカ植民地の独立と合衆国憲法」に関する研究で、1974（昭和49）年に政治学修士の学位を授与された。

1980（昭和55）年に、SOAS（The School of Oriental and African Studies：ロンドン大学東洋アフリカ研究学院）のArea Study（地域研究科）法学修士課程に進学された。そこで、シエラレオネの現代政治を専攻され、1982（昭和57）年、地域学修士の学位を授与された。先生の研究対象は日本の憲法学や行政法学に限定されず、その人間性の大きさにふさわしく、アメリカ史や西アフリカ史等、幅広い知見を基にしている。地域と歴史を融合した法学研究を目指されて、そのご研究は中身の濃いものになっている。法学の中には、歴史研究と切り離されたものもあるが、そのような法学理論とは異なり、児玉先生は歴史的起源の研究や、異文化との比較を通じて、特定の法学概念の内容を深く掘り下げられた。

SOASでは、その研究の一環として、ひと月ほど、西アフリカのシエラレオネに滞在され、現地での研究にも従事された。今でも、マンデインゴやテムネ等、西アフリカ諸族の話が次々に飛び出してくる。シエラレオネ滞在時の逸話として、密林地帯の村で、夜、行水をするのに、裸になって村道を歩くとき、黒人であるその地域の人たちは闇に紛れることができたのに、自分は白く光って困ったという笑い話も聞

かせてくれる、気さくな先生である。先生はしばしば本当のような嘘の話をされるのもお好きで、その語り口はイギリス仕込みのジョークではないかと思わせられるものになっている。学生の場合には、その物語性を見抜けず、本当に恐縮してしまうことも、あったやに聞いている。恐縮してしまうほど、学生の教育には厳しい態度を示され、それをジョークで煙に巻いているようでもあった。

イギリスからの帰国後、1986（昭和61）年に『議院内閣制の研究：イギリス憲政史の一断面』、1988（昭和63）年に『イギリス憲法の研究』、1991（平成3）年に『法における個人主義と公共の福祉』と、矢継ぎ早に研究成果を発表された。最近は、イギリス行政法における自然的正義に関する研究や、議員の不逮捕特権に関する研究に従事された。明星大学『経済学研究紀要』にも権利請願（1628年）、マグナ・カルタ、共和国と王政復古、ヘンリー7世、星室裁判所といったイギリスの法制史・政治史に関連する論文や、イギリスの行政法に関する論文を次々と発表された。

明星大学 経済学科
児 島 秀 樹